

JSPS Stockholm Newsletter

Vol. 47



Prologue 01

GlobalizationとMigration

News 02

2015年度第1回KVA-JSPSセミナーの開催
スウェーデン同窓会セミナーの開催
第1回在ノルウェー日本人研究者の会開催

Reports 04

フィンランド同窓会セミナー“Future Diagnostics”
「ヒト褐色脂肪組織と肥満」に関するシンポジウム
その他打合せ・来会等
コラム～ 現代に息づく北欧神話 ～

*Academic
Information* 10

大隅良典東京工業大学栄誉教授がガードナー国際賞、国際生物学賞を受賞・坂口志文大阪大学特別教授がガードナー国際賞を同時受賞/スウェーデン:ストックホルム・レジリエンス・センター所長ロックストローム博士がコスモス国際賞を受賞/スウェーデン:欧州核破砕中性子源(ESS)及びMAX IV学際研究施設に約1億7千8百万クローナ(約26億円)の支援/スウェーデン: Carl-Henrik Heldin教授がSciLifeLab*新理事長に任命される/スウェーデン: ダブルディグリー・プログラムへの新たな支援/フィンランド: 新政権、高等教育関連予算の大幅減を発表/デンマーク: 高等教育機関に在籍する留学生が倍増/デンマーク: 就職を見据えた分野選択/ノルウェー: 日本・ノルウェーエネルギーサイエンスウィーク2015/ノルウェー: リサーチ・カウンシル・オブ・ノルウェー新総合戦略を発表/ノルウェー: 教育と開発のためのオスロ・サミット開催/リトアニア: サンライズバレー技術革新センターがオープン/ KI Bladet

Notice 15

イベント予定
事業のご案内
カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)同窓会会員募集
JSPS Stockholm Newsletter 定期購読

GlobalizationとMigration

JSPSストックホルム研究連絡センター長 阿久津 秀雄

春から夏にかけてストックホルム郊外の海辺を散策するとキョクアジサシを見ることができる。ツバメに似た尾羽を持ち、優雅に飛翔しながら水中に獲物を見つけると急降下して漁にいそしむ。堤防で羽を休めているときには近くを人が通りかかっても気にしない。その土地の風景に完全に溶け込んでいるように見える。しかし、キョクアジサシのキョクは北極、南極の極であり、南極圏からの長い旅を経てスウェーデンにたどり着いたよそ者である。最も長い渡りをする鳥の一つで、1年間に北極圏と南極圏を往復し、約32,000 kmを移動すると言われている。まさに地球を股にかけて渡りをしているglobal migratorである。何でもこまですて、と思うが、彼らにはそれだけの犠牲を払っても求めたい生活の質があるのであろう。一方、スウェーデンの暗く寒い冬を選ぶカササギ、ゴシキヒワ等、留鳥も多い。それぞれによりよい生活の質を求めて多様な生活スタイルを確立している。渡り鳥はよそ者であってもその土地の夏、あるいは冬の景色と生態系にとって欠かせない存在となっていることも忘れてはならない。

人類もかつては狩猟・採集をなりわいとする非定住者が基本であったが、農業の発展とともに定住者が多くなり、遊牧民に代表される渡りは少なくなる。産業の発展とともに国民国家が成立し、国境が渡りを妨げるようになる。しかし、文明社会の膨張は別の形の渡りを作り出してきた。

地中海文明圏を支配下におさめたローマ帝国の北への膨張はゲルマン民族を初めとした民族大移動を引き起こす。ヨーロッパ人による新大陸の“発見”はヨーロッパ人の南北アメリカ大陸への大移動により、南北アメリカをヨーロッパ化する。さらに、第2次世界大戦中におけるナチスドイツの膨張はユダヤ人の米国、およびパレスチナへの移動を引き起こし、イスラエルの建国につながった。それぞれに厳しい状況の中からよりよい生活を求めての移住である。特に優秀なユダヤ人科学者が大挙して米国に移ったことは米国の科学の水準を飛躍させ、世界のトップに押し上げた。第2次大戦後の米国は世界中の優秀な学生、研究者を集めることにより科学技術における世界トップの地位を不動のものとしている。



ゴシキヒワ

研究者にとっては留学、移住、国際会議等、地球を股にかけての渡りは人生の一部となった。

経済のグローバル化が進むとともに、大学のグローバルな競争が進み、先進各国は米国にならって世界中から優秀な学生と研究者を集めることに力を入れ始めた。大学のグローバル化の重要性は単に優秀な人材を集めることだけにあるのではなく、異なった考え方、異なった文明的背景を持つ人々が一緒に学び、働くことにより異質な発想や予想外の展開の可能性が出てくることにある。これは島国日本ではなかなか実感されにくい点である。北欧諸国のグローバル化は南北アメリカ、アジア、アフリカを対象として進められている。しかし、焦点を絞った取り組みも重要で、国際的にトップレベルの研究者を招聘することがその一つである。最も効率的に大学の研究レベルを上げることができる。そのため

にスウェーデンでは2013年から2016年の4年間で“International Recruitment of Top Researchers”という予算が2億5千万クローナ(約36億円; 2015.9.9) 特別に措置されている。ヘルシンキ大学の学長も今、同大学にとって最も重要なことの一つは優秀な研究者のrecruit, recruit, and recruitであると全学に告示している。優秀な研究者をめぐって各国、各大学はしのぎを削っている。

スウェーデンで見ると教員のレベルではかなりグローバル化が進んでおり、大学院生レベルでは純粋なスウェーデン人より留学外国人および永住権を持つ“外国人”(帰化したものを含む)が多くなっているように見える。大学院レベルの授業は英語で教えられており、グローバルな課題に焦点を絞った大学院プログラムも準備されている。カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)では“Global Master's Programs”として6つのコースを提供して新興諸国を中心とした留学生を集めている。大学のグローバル化は移民受け入れ政策に支えられている所もある。移民社会から大学院に進学し、さらに教員へと進む者もいる。特に難民の中には高度な教育を受けていた青年や、知識階層の人々が相当いる。外国から直接大学院生や教員として渡ってきた場合でもこのような多文化社会では定着しやすい。日本で大学のグローバル化を考える場合、大学の中のみでのグローバル化を考えがちであるが、それが根付くために各大学での勉学や教育・研究のために移って来る外国人が家族を含めて安心して暮らしていける社会的文化的環境の創出も欠かせない課題であろう。渡り鳥が移動するときには群れをつくって渡っていくのにはそれなりの理由がある。



キョクアジサシ

2015年度第1回KVA-JSPSセミナーの開催

当センターは2009年度からスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)との共催で、当地で関心が高い研究業績を有する日本の研究者の講演会を企画・開催している。

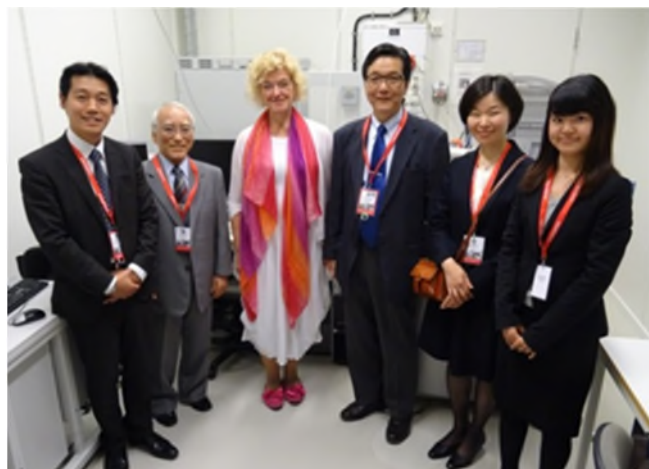
2015年度1回目となる今回は、幾原雄一東京大学工学系研究科教授を招聘し、2015年7月17日～7月23日にかけて、リンシェーピン大学(リンシェーピン市)及びシャルマーシュ工科大学(ヨーテボリ市)において同セミナーを開催した。

幾原教授は、7月17日にリンシェーピン大学で”Atom-Resolved STEM Characterization of Grain Boundaries and Properties in Oxides”をテーマとした講演を行い、7月21日～23日には、シャルマーシュ工科大学において”Grain Boundary Atomic Structures and In-Situ TEM Observations of Dislocation/GB Interaction”をテーマとした講演を行った。セミナー期間中100名以上の学生や研究者が出席した。講演後のディスカッションやワークショップでは、講演者と参加者の活発な意見交換が行われていた。

(幾原教授によるレポートは次号掲載予定)



リンシェーピン大学にて



シャルマーシュ工科大学にて



シャルマーシュ工科大学での講演

スウェーデン同窓会セミナーの開催

2015年9月2日～3日の2日間にわたり、ウプサラ大学において”Japanese Ethics and Technology”をテーマにJSPSスウェーデン同窓会セミナーが開催された。スウェーデンの研究者および日本の研究者等計14名が講演を行った。

2日は、セミナーオーガナイザーのThomas Lennerforsウプサラ大学准教授の開会挨拶に始まり、Marika Edoffウプサラ大学科学技術研究科(Faculty of Science and Technology)副研究科長によるウプサラ大学紹介、阿久津センター長によるJSPS事業紹介が行われた。また、2014年度JSPSサマープログラム参加者Petter B. Forsbergさんによる経験談発表も行われた。午後からは、日本人講師として招へいた間嶋 崇 専修大学准教授による”From “Green” to “Smart”: The impact of Fukushima on “Green IT” in Japan”と題した講演が行われた。続いて木村 朗子 津田塾大学教授、出口 康夫 京都大学准教授他が講演を行った。

(間嶋准教授によるレポートは次号掲載予定)



参加者による集合写真



間嶋准教授による講演

第1回 在ノルウェー日本人研究者の会開催

2015年9月4日、在ノルウェー日本国大使公邸(オスロ)において、第1回在ノルウェー日本人研究者の会が開催された。本会は、ノルウェーの大学、研究機関等で働く日本人研究者の親交および今後の更なる研究促進や協働を目指して、在ノルウェー日本国大使館および日本学術振興会(JSPS)ストックホルム研究連絡センターの共催で開催された。

当日は、ノルウェー各地の大学、研究機関等に所属する日本人研究者13名が参加した。冒頭、國方俊男在ノルウェー日本国大使より開会挨拶があり、続いて、阿久津センター長による挨拶、川窪副センター長による研究者ネットワークに関する事務説明、参加者による自己紹介が行われた。その後、参加者は、研究やノルウェーでの生活について活発な情報交換を行った。参加した研究者からは、ノルウェーで活躍している日本人研究者と知り合い、意見交換できたことは大変有意義で、互いに良い刺激を受けた等の感想が寄せられた。



國方在ノルウェー日本国大使による開会挨拶



歓談の様子



フィンランド同窓会セミナー“Future Diagnostics”

兵庫医療大学 准教授 芝崎誠司

2015年5月、フィンランド・トゥルクにおいて開催されたセミナー“Future Diagnostics”にて講演の機会を頂きました。“The recent challenges in red biotechnology - for accelerating the development of novel diagnostic tools and pharmaceuticals”という演題で、最新バイオテクノロジーを用いた疾患の早期発見・治療に結びつく診断技術、疾患の予防法の開発事例について紹介しました。

現在、がんや脳疾患、心疾患など重要な疾患に対する治療法やさまざまなバイオ医薬品の開発に加え、再生医療など先進的な医療に注目が集まっています。一方、これまで世界中の多くの人命を奪ってきた感染症については、有効な解決手段がないものも多くあり、例えば、世界三大感染症であるエイズ、マラリア、結核による死者数は年間800万人にもものぼります。これらの感染症に対する医薬品開発は、病原体の宿主免疫系の回避に遅れをとっているのが現状といえます。さらに根本的な治療法がない真菌症なども、免疫力が低下している高齢者にとっては深刻な疾患となっています。筆者と共同研究者はこれまで、感染症のモデルとしてカンジダ症を選び、有効な予防法と診断法の基盤技術の開発に取り組んできました。

カンジダ症を引き起こす*Candida albicans*は日和見病原性真菌であり、本真菌症の致死率は50%以上にも達します。癌やエイズによる免疫力の低下は、菌糸型の*C. albicans*の侵入へとつながり多臓器不全を招きます。既存の抗真菌薬を用いた治療における問題点として、重い副作用、耐性菌の増加、早期診断法が未確立であることが挙げられます。そこで私たちは、従来の医薬開発とは異なる概念で、バイオテクノロジーの手法を用い「治療、診断、予防」に資する医薬原体の創製法の開発に取り組んできました。本講演では「診断」と「予防」の部分について紹介しました。

筆者らはまず、*C. albicans*の特徴的な病原性因子である分泌型アスパラギン酸プロテアーゼ（Sap）に着目しました。*C. albicans*は10種類の病原性分泌型プロテアーゼ（Sap1-10）を有し、上皮組織の破壊・免疫システムの回避に働いています。この病原性プロテアーゼの活性を利用することで、カンジダ症の早期診断法を開発できるのではないかと考え、Sap1-10が活発に働いている時にのみ蛍光を発する、診断用ペプチドを設計しました。そこで、基質として475種類のペプチドから成るFRETS-25Xaa libraryを用い、網羅的に基質特異性を調べました。特に重要な病原性プロテアーゼであるSap1-3の基質特異性を詳しく調べたところ、475種類のペプチドのうち、GFIKAFPK配列を最も効率よく切断することが明らかになりました。



芝崎准教授による講演

次に、蛍光基と消光基の間にGFIKAFPKペプチドを配置し、*C. albicans*のSap isozymeに切断されることで蛍光を発する分子を作製しました。これにより、カンジダ症の発症部位を早期に決定できる可能性が生まれました。実際、*C. albicans*と反応させたときに強い蛍光が観察されています。酵素学的な解析結果では、ペプチドとSap isozymeの相互作用は弱く、ペプチド配列に最適化すべき余地があり、今後、より高感度の診断ペプチドを設計することが可能だと考えられます。また、このような診断薬開発の戦略は、特徴的なプロテアーゼを持つ他の病原体に対しても有用であると思われる。

講演の後半では、「予防」のための基盤技術開発として、経口ワクチンの創製について紹介しました。筆者らはこれまで、タンパク質分子を微生物細胞表面に固定化する技術、細胞表面工学、または分子ディスプレイ法を開発してきました。カンジダ症モデルマウスへのワクチンとしての一定の効果が確認されている、Enolaseタンパク質（Eno1p）をモデルとし、細胞表面提示型ワクチンについて検討しました。

Eno1pを提示した細胞のマウスへの経口投与実験では、ワクチン投与後、致死量の*C. albicans*を接種したところ、35日目でEno1p提示酵母投与群では70%（コントロール群0%）の生存率が観察されました。今後、別の有望な抗原候補タンパク質の提示や、投与量の最適化により、より効果の高い経口ワクチンの開発が考えられます。また、簡便な経口ワクチンの創製法として、多様な感染症に適応できる技術として発展することを期待しております。

今回、講演の機会を頂き滞在中お世話になりましたトゥルク応用科学大学、トゥルク大学、JSPSの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

「ヒト褐色脂肪組織と肥満」に関するシンポジウム

北海道大学 名誉教授 斉藤昌之

2015年6月2日に“Human brown adipose tissue and obesity”に関するシンポジウムが、日本学術振興会（JSPS）、スウェーデン王立科学アカデミー（KVA）、ストックホルム大学、北海道大学の共催で、KVAのLinneus Hallで開催された。以下、その概要を報告する。

糖尿病や高血圧などの生活習慣病の原因の一つが肥満であることは良く知られている。普段、肥満を話題にする時には、当たり前のように「（体）脂肪」という言葉が使われているが、ここでいう「体脂肪」は白色脂肪（組織）を指している。所が、ヒトを含めて哺乳動物には褐色の脂肪組織も存在する。褐色脂肪brown adipose tissueはその名前からもわかるように褐色を帯びているが、量も少なく体内の特殊な場所にしか存在しないので、普段目にする機会はほとんど無い。しかし最近、この特殊な褐色脂肪が肥満対策の一つとしてホットな注目を集めておりこの5年間で学術論文数も倍増している。その契機の一つは、私達が2007年に「ヒト成人には褐色脂肪はほとんど無い」との従来の定説を覆し「ヒト成人にも褐色脂肪がある程度存在し、エネルギー代謝や体温、体脂肪の調節に寄与している」ことを明らかにしたことである。本シンポジウムを企画されたBarbara Cannon教授は長年に渡って褐色脂肪に関する基礎研究を展開しておりこの領域の第一人者である。同教授がKVA長官としてのお立場を踏まえて本シンポジウムを企画されたのは誠に時機を得たものと言えよう。

シンポジウムの参加者は、スウェーデンのみならず他のヨーロッパ諸国からの約60名であったが、日本からは私斉藤と共同研究者（北海道大学、米代武司博士）、そしてカロリンスカ医科大学（Karolinska Institutet）に留学中の2名の研究者とJSPSストックホルム連絡センターの方々が参加した。まず、Cannon教授の挨拶に続いてNedergaard教授（ストックホルム大学）がヒト褐色脂肪研究に関する歴史を概説した後、私がBrown adipose tissue in small rodents, dogs and humansと題して30年間に渡る研究結果について、特にヒトでの知見を中心に1時間講演した。

続いてvan Marken Lichtenbelt博士（マーストリヒト大学）、Virtanen博士（トゥルク大学）など、一線で活躍している10名の研究者が講演し、活発な質疑・応答と意見交換が行われた。特に、MRIにより褐色脂肪を評価する方法の開発や、褐色脂肪を制御する様々な要因（寒冷暴露、胆汁酸、BMP4など）などについての発表は、褐色脂肪を肥満の予防・軽減策のターゲットとするに当たっての重要な知見を提供しており、今後の発展が期待される。

シンポジウムの後は、Cannon教授の案内でノーベル賞選考会議が行われる部屋を見学してから夕食となったが、森元誠二在スウェーデン日本国大使も出席されて、両国の学術交流などについて懇談に花が咲いた。今回のシンポジウムは、両国・両大学のみならず他のグループも交えた交流・協力を促進し、今後の更なる発展へとつながる契機となるに違いない。

最後に色々とお世話になったJSPSの皆様に深く感謝致します。



斉藤名誉教授による講演



会場となった王立科学アカデミー（KVA）

その他打合せ・来会等

高橋仁 カロリンスカ研究所SciLifeLab研究員の来会(6月3日)

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) SciLifeLabの高橋仁研究員が、当センターを訪問した。JSPSの国際交流事業、スウェーデンにおける日本人研究者ネットワーク等について情報提供を行った。



中村卓司 国立極地研究所副所長の来会(6月8日)

ストックホルムにおいて開催された欧州非干渉散乱科学協会 (EISCAT*)の会議に出席するため来瑞中の中村卓司国立極地研究所副所長が、当センターを訪問した。中村副所長から、極地研究所とノルウェーをはじめとした北欧諸国との研究協力関係について説明があり、当方からは、JSPS外国人研究者招へい事業等の国際交流事業に関する説明をした。

*EISCATは、非干渉散乱 (IS) レーダーを用いた欧州における宇宙科学研究や教育を推進するため、レーダーの建設と維持・運用を主目的として1975年に設立された。日本は1996年に加盟した。



スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)訪問(6月17日)



IVAのBjörn O.Nilsson会長に挨拶すると共に、Johan Weigelt事務局長兼副会長、Maria Dollhopf国際コーディネーター、瑞日基金のEdvard Fleetwood事務局長、佐藤政文在スウェーデン日本国大使館一等書記官と、今年度開催予定のIVAセミナーの内容や候補者について意見交換を行った。

海外研究連絡センター長会議(6月22日)

阿久津センター長が、東京にて開催されたJSPS海外研究連絡センター長会議に出席した。ワシントン (米)、サンフランシスコ (米)、ロンドン (英)、ボン (独)、ストックホルム (瑞)、ストラスブール (仏)、バンコク (タイ)、北京 (中)、カイロ (エジプト)、ナイロビ (ケニア) の海外連絡センター長が出席し、各研究連絡センターの運営状況および国際交流状況について意見交換が行われた。

山中伸弥 京都大学iPS細胞研究所所長夫妻を囲む夕食会(6月24日)

阿久津センター長が、在スウェーデン日本国大使公邸で開催された2012年ノーベル生理学・医学賞受賞者である山中伸弥京都大学iPS細胞研究所所長夫妻を囲む夕食会に参加した。

夕食会には、森元誠二在スウェーデン日本国大使夫妻をはじめ、Christina Mobergスウェーデン王立科学アカデミー(KVA)長官、Anders Hamstenカロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)学長、Jan Olof Jacke総合製薬会社アストラゼネカ社長、Katarina Bjelkeウプサラ大学副学長等が参加した。

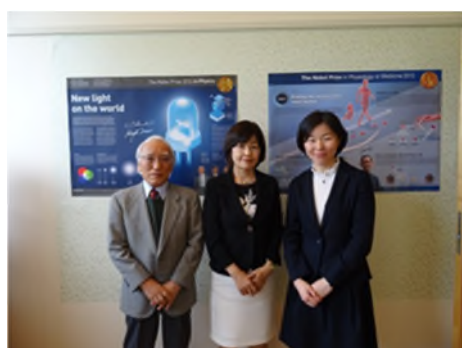
在スウェーデン日本国大使館

<http://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/>



在スウェーデン日本大使館ホームページより転載

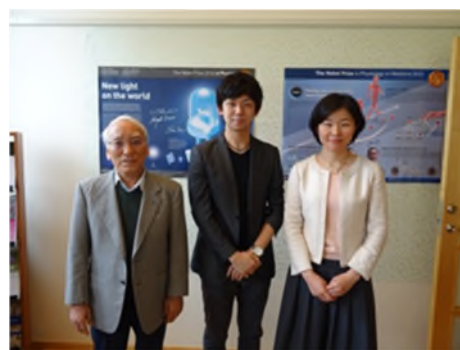
跡見順子 東京農工大学客員教授の来会(6月26日)



跡見順子東京農工大学客員教授が当センターを訪問した。北欧との研究交流状況や研究内容について説明があり、当方からはJSPS国際交流事業に関する説明をした。

吉田竜 日本大学職員の来会(6月30日)

日本大学歯学部研究事務課 吉田竜職員が当センターを訪問した。吉田職員から日本大学における国際交流状況について説明があり、当方からは北欧における研究支援およびJSPS国際交流事業について説明した。



早稲田大学 中川はるか職員・熊部広志職員の来会(7月2日)



早稲田大学国際部国際課の中川はるか職員および熊部広志職員が、当センターを訪問した。中川職員から早稲田大学150周年を見据えた

「Waseda vision150」等について説明があり、当方からはJSPSの国際交流事業および北欧における日本の大学の交流状況等について説明した。

エストニア訪問(7月8日)

阿久津センター長、川窪副センター長がエストニア共和国を訪問した。タリン市でEstonian Academy of Sciencesを訪問して、Tarmo Soomere長官、Margus Lopp事務局長およびAnne Põitel国際担当官との会談を行い、タルトゥ市ではEstonian Research Council Ülle Must国際共同研究部長とランチミーティングを行った。両機関の概要について説明を受け、当方からはJSPS及びストックホルム研究連絡センターの説明を行った。また、今後の協力関係構築について意見交換を行った。



齋藤直子 京都大学准教授とのディナーミーティング(7月30日)



阿久津センター長、川窪副センター長が、ヘルシンキ大学の客員フェローとしてフィンランドに滞在中の齋藤直子 京都大学准教授とストックホルム市内においてディナーミーティングを行った。12月にヘルシンキにて開催予定の京都大学、ヘルシンキ大学（宗教学部COE、ヘルシンキコレgium）、JSPSストックホルム研究連絡センター共催のシンポジウムについて意見交換を行った。

ステファン・ノレーン東京大学総長室顧問の来会(8月19日)

ステファン・ノレーン東京大学総長室顧問・理化学研究所相談役・Senior Adviser to Sweden's Minister for Enterprise and Innovationが、当センターを訪問した。ノレーン総長室顧問から、東京大学に関連する事項等について情報提供があった。また、当センターの活動について質問があり、昨年度のシンポジウムや開催予定のセミナー等について情報提供した。



春日文子 国立医薬品食品衛生研究所 安全情報部長

福士謙介 東京大学国際高等研究所サステナビリティ学連携研究機構 教授の来会(8月20日)



地球環境研究の新たな国際的プラットフォームであるFuture Earth*に関する打合せのため来瑞中の春日文子国立医薬品食品衛生研究所安全情報部長および福士謙介東京大学国際高等研究所サステナビリティ学連携研究機構教授が当センターを訪問した。春日部長から日本学術会議副会長在職時からのFuture Earthへの取り組みについて説明があり、福士教授から、Future Earthの概要について説明があった。また、福士教授からはJSPS研究拠点形成事業の実施状況についても説明があった。当方からはJSPSの国際事業、センターの活動について説明した。

*Future Earthウェブサイト
<http://www.futureearth.org/>

宮園浩平 東京大学医学部長を囲む夕食会(8月24日)

阿久津センター長が、在スウェーデン日本国大使公邸で開催された宮園浩平東京大学医学部長を囲む夕食会に参加した。

夕食会には、森元誠二在スウェーデン日本国大使をはじめ、Carl-Henrik Heldinノーベル財団理事長、Kerstin Thamカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 副学長、Hans-Gustaf Ljunggrenカロリンスカ医科大学研究科長他、学術機関関係者が参加し、日・スウェーデン間の科学技術交流等について話し合った。

在スウェーデン日本国大使館

<http://www.se.emb-japan.go.jp/nihongo/>



在スウェーデン日本大使館ホームページより転載

コラム～現代に息づく北欧神話～



北欧神話とは、キリスト教化される前のノルマン人の信仰に基づく神話でスカンディナヴィア神話とも呼ばれる。ゲルマン神話の一種で、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランドおよびフェロー諸島に伝承されていた。神話というと遠い昔の話のようだが、現代の生活や文化にも大きな影響を残している。

例えば、曜日名では、火曜日(瑞:Tisdag英:Tuesday)は軍神Týr(チュール/ティル)、水曜日(瑞:Onsdag英:Wednesday)は最高神Odin(オーディン)、木曜日(瑞:Torsdag英:Thursday)は雷神Thor(トール/ソー)、金曜日(瑞:Fredag 英:Friday)は愛と美の女神Freyja(フレイヤ)または結婚と豊穡の女神Frigg(フリッグ)から名前が付けられている。ちなみに土曜日(瑞:Lördag 英:Saturaday)については、この日が入浴日または洗濯日だったことを表す古ノルド語“Lögaredagen” (Löske=洗う)に由来し、英語の土星(サターン)との関連は無い。

曜日名その他、文化にも大きな影響を与えている。ワーグナーのオペラ「ニーベルングの指輪」、トールキンの「指輪物語」には北欧神話(ゲルマン神話)由来の人物

名や巨人、エルフ、ドワーフといった生き物が登場する。

また、映画でもおなじみのアメリカの人気コミックヒーローの「マイティ・ソー」(雷神トール/ソー)、日本の人気漫画「進撃の巨人」(巨人ユミル)も北欧神話の影響を受けている。

(参考) <http://www.bbc.co.uk/religion/0/20394641>

写真:左 ストックホルムDjurgården橋のThor像 右 土産物店のThorのフィギュア



大隅良典東京工業大学栄誉教授がガードナー国際賞、国際生物学賞を受賞 坂口志文大阪大学特別教授がガードナー国際賞を同時受賞

大隅良典東京工業大学栄誉教授が、2015年ガードナー国際賞及び第31回国際生物学賞、坂口志文大阪大学特別教授が2015年ガードナー国際賞をそれぞれ受賞することとなった。

大隅栄誉教授は、2014年9月に東京工業大学、ウプサラ大学、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で開催された「東京工業大学・ウプサラ大学合同シンポジウム」(於 ウプサラ大学)において講演した。

大隅栄誉教授のガードナー国際賞の受賞理由は、オートファジー(自食作用)の仕組みの分子レベルでの解明である。オートファジーとは細胞内のタンパク質の分解と再利用の基本的な仕組みで、その機能に異常が生じると神経変性疾患、癌、感染症等の病気を引き起こすなど医療においてもその重要性が認識され始めている。また、アルツハイマー病などの神経変性疾患、癌、加齢に伴う病気などを治療する医療への応用が期待されている。

また、国際生物学賞の授賞理由は、多数の ATG 遺伝子の働きによってオートファジーが引き起こされるメカニズムを解明し、生物界に広く保存された重要な生命現象であることを示したことである。国際生物学賞委員会は、生命科学の重要な新しい分野を確立したと大隅栄誉教授の功績を評価した。

坂口特別教授は、2014年6月に大阪大学、カロリンスカ医科大学(Karolinska Institutet)、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で開催された「カロリンスカ医科大学・大阪大学ジョイントシンポジウム」(於 カロリンスカ医科大学)において講演した。

坂口特別教授のガードナー国際賞の授賞理由は、制御性T細胞の発見と免疫における役割の解明、ならびに自己免疫疾患と癌の治療への応用である。坂口特別教授は、授賞にあたり「人への貢献、特にがんや難治疾患の治療にこの研究を活かすことが重要と改めて認識しています。将来根治がどこまで可能かと期待をもちながら研究を続けていきたい。」と述べた。

* ガードナー国際賞:ガードナー国際賞(Gairdner International Award)は、カナダのガードナー財団より、生命医学に対して顕著な発見や貢献を行った者に与えられる学術賞。毎年、3名から6名に与えられる。賞金は10万カナダドル。生命医学に関する賞として、最も著名な賞の一つとして知られる。1959年から開始され、これまでの55年間に於いて15か国320人が受賞、うち82人がその後ノーベル賞を受賞している。

* 国際生物学賞:昭和60年に創設され、日本学術振興会の国際生物学賞委員会が生物学の授賞分野を選定の上、当該分野の研究において優れた業績を挙げ、世界の学術の進歩に大きな貢献をした研究者に授与される。

日本学術振興会(国際生物学賞) <http://www.jsps.go.jp/j-biol/index.html>

東京工業大学 <http://www.titech.ac.jp/news/2015/030265.html>

大阪大学 http://www.osaka-u.ac.jp/ja/news/topics/2015/03/20150326_01

スウェーデン:ストックホルム・レジリエンス・センター所長ロックストローム博士がコスモス国際賞を受賞

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会(会長:今井敬 一般社団法人日本経済団体連合会名誉会長)は、7月31日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会(委員長:岸本忠三 大阪大学免疫学フロンティア研究センター特任教授)、同選考専門委員会(委員長:武内和彦 東京大学サステイナビリティ学連携研究機構長・教授)からの報告を受け、ストックホルム・レジリエンス・センター所長のヨハン・ロックストローム博士を2015年(第23回)コスモス国際賞の受賞者に決定した。

ロックストローム博士は、人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達しており、この圧力が大きくなりすぎると、例えば気候、水環境、生態系などに内在するレジリエンスの限界を超えたときに不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、人類が生存できる範囲の限界=プラネタリーバウンダリーを把握することで、人類にとっての壊滅的な変化が起こることを回避できるのではないか、そのような限界(臨界点: Tipping point)がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

プラネタリーバウンダリーの概念とその実証結果は、地球環境研究にかかわる多くの研究者に大きなインパクトを与えた。

また、持続可能な地球に関する研究の超学際的な連携・協働のための国際的な枠組みであるFuture Earth(フューチャー・アース)*の構想などにも大きな影響を与えている。

コスモス国際賞ウェブサイト

<http://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/whatsnew-0729.html>

*Future Earthウェブサイト

<http://www.futureearth.org/>



コスモス国際賞ウェブサイトより転載

スウェーデン: 欧州核破砕中性子源(ESS)及びMAX IV学際研究施設に約1億7千8百万クローナ(約26億円)の支援

2015年6月15日、ヨーロッパ連合は、欧州核破砕中性子源(ESS)及びMAX IV学際研究施設に約1億7千8百万クローナ(約26億円)の支援をすることを発表した。ESS(European Spallation Source)はルンド郊外にヨーロッパの共同研究インフラとして、欧州研究インフラ・コンソーシアム(ERIC)の枠組みで設立される材料科学の研究施設である。この事業には、欧州15か国が参画しており、2016年には、世界最先端のシンクローン光施設が始動する予定である。MAX IV学際研究施設はスウェーデンリサーチカウンスル、スウェーデン技術革新システム庁(VINNOVA)、ルンド大学、スコーネ県の合意の下、2010年に開設された電子加速器研究施設である。

Max Labウェブサイト

https://www.maxlab.lu.se/sv/MAX%20IV_ESS

スウェーデン: Carl-Henrik Heldin教授がSciLifeLab*新理事長に任命される

スウェーデン政府は、2015年10月にCarl-Henrik Heldin教授がSciLifeLab新理事長に就任することを発表した。

Heldin氏は、ウプサラ大学分子細胞生物学の教授である他、スウェーデン王立科学アカデミーを含む数々のアカデミー会員、ノーベル財団理事長を務めている。また、2014年には、欧州研究評議会(ERC)副会長を務めた。Heldin教授は、日本との繋がりも深く、JSPSスウェーデン同窓会の会員でもある。

*SciLifeLab(Science for Life Laboratory)は、2010年に設置され、2013年に政府によってナショナルセンターとして位置づけられている。健康と環境に焦点を絞った分子生物科学研究拠点である。

SciLifeLabウェブサイト

<http://www.scilifelab.se/>

SciLifeLabに関する記事

JSPS Stockholm Newsletter 2014 SummerNo.43号

<http://www.jsps-sto.com/japanesenews.aspx>

スウェーデン: ダブルディグリー・プログラムへの新たな支援

スウェーデン研究・高等教育国際協力財団(STINT)は、2015年から2018年にかけてダブルディグリー・プログラムを支援する新しい事業に450万クローナ(約6千4百万円)を拠出すると発表した。この事業には、参加大学も、少なくともSTINTと同等の出資を行うこととなる。

支援対象の事業は、以下の通り。

スウェーデン側所属大学	相手国側大学	分野
ルンド大学	クィーンズランド大学(オーストラリア)	工学
ルレア工科大学	ハルビン工業大学(中国)	都市・環境・資源工学
ウプサラ大学	サンパウロ大学(ブラジル)	物理・天文学
	マケレレ大学(ウガンダ)	薬学
西スウェーデン大学	VIT大学(インド)	工学
シャルマーシュ工科大学	中南大学(中国)	材料・生産技術学

STINTウェブサイト <http://www.stint.se/en/news/var/newsID/496>

フィンランド: 新政権、高等教育関連予算の大幅減を発表

フィンランドの新政権は、2019年までに45億ユーロの予算削減をすると発表した。これには、約5億ユーロの高等教育関連予算が含まれる。

これに対し、ヘルシンキ大学Jukka Kola学長は、大幅な予算削減は、教育や研究の質に深刻な影響を及ぼす恐れがあり、フィンランドの競争力低下を招くと共に政府の掲げる教育先進国構想とも逆行していると述べた。

また、政府は、欧州以外の地域(非欧州連合(Non-EU)、非欧州経済領域(Non-EEA))からの留学生に対する学費徴収を導入するとしている。それに対して、フィンランド学生ユニオンおよびフィンランド応用科学学生ユニオンは、留学生の約半数は、卒業後もフィンランドに滞在し、能力の高い労働力となっている。移民政策の観点からは、さらに残りの半分についての雇用促進に努めるべきだとし、学費徴収について失望の意を示している。

フィンランドをとりまく経済状況は、高い失業率とロシアへの輸出減、軍事費の増加、急速な高齢化と、厳しい状態が続いている。

University World Newsウェブサイト

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20150606081055889>

Helsinki Universityウェブサイト

<https://www.helsinki.fi/en/news/new-government-tripping-up-higher-education-in-finland>

デンマーク: 高等教育機関に在籍する留学生が倍増

2013年、デンマークの大学に在籍する正規留学生は、約2万4千人となった。これは、2007年の在籍数と比べ約2倍となり、デンマークの大学生数全体の9.2%を占める。2012年～2013年の増加率が9%となった。留学生受入の多い大学TOP3は、コペンハーゲン商科大学(CBS)、コペンハーゲン大学、南デンマーク大学である。大部分の留学生はヨーロッパ出身だが、中国からの留学生の増加率が著しく留学生出身国のTOP10に入っている。

Sofie Carsten Nielsen 高等教育・科学大臣は、留学生の増加は、デンマークの学生にとって国際的な環境に接する機会を提供すると共に、多くの職種で国際化が進むデンマーク社会にとっても非常に有益である。デンマークの発展には、優秀な外国人の若者の労働市場への参入が不可欠である。外国人労働者のデンマーク定住を促進するものとも効果的な方法の一つは、有能な若者を高等教育機関に惹きつけることであると述べた。

高等教育・科学省ウェブサイト

<http://ufm.dk/en/newsroom/news/2015/considerably-more-international-students-pursuing-a-full-study-programme-in-denmark>

デンマーク: 就職を見据えた分野選択

2015年8月4日、約65,300名(同年7月30日時点)のデンマーク国内大学進学希望者が入学を許可されたことが発表された。また、大学卒業後の就職に有利な学科への入学許可者の増加が顕著であるとの分析が公表された。

ビジネスアカデミーや専門職学位プログラムにおける経済・商業、技術分野では、入学許可者が10%以上増加した。また、2014年に比べ、工学系学科では学部レベルで9%、修士レベルで4%の増加となった。教育福祉分野でも増加傾向にあり、教員養成学科において6%の増加となった。ビジネスアカデミーや専門職学位プログラムへの入学者は2007年～2015年の間に50%増加している。一方、IT関連分野では、雇用の低下を受けて19%の減少となっている他、デザイン分野では13%、人文科学では3%の減少となった。

Esben Lunde Larson 高等教育・科学大臣は、「ビジネスアカデミーの卒業生は、民間企業や中小企業の教育レベル上昇に大きな貢献をしている。また、教育福祉分野の入学者の増加についても注目している。これらの分野への入学者の増加が著しいのは喜ばしいことである。」と述べた。

高等教育・科学省ウェブサイト

<http://ufm.dk/en/newsroom/press-releases/2015/more-students-admitted-to-education-programmes-with-good-employment-prospects>

ノルウェー: 日本・ノルウェーエネルギーサイエンスウィーク2015

2015年5月27日～28日、日本・ノルウェーサイエンスウィークが在京ノルウェー大使館、リサーチ・カウンシル・オブ・ノルウェー、科学技術振興機構(JST)他の共催で開催された。同イベントは、2013年、2014年に続き、今回が3回目となる。

今回のサイエンスウィークは、2日間にわたり、エネルギー分野における両国の幅広い協力関係に基づき、「エネルギーと環境」をテーマに行われた。両国の主な研究開発活動や重点的な研究分野に焦点を当て、環境に優しいエネルギーの新たな可能性とビジネスの機会、新たなエネルギー・ソリューションを模索する講演が行われた。

また、低炭素型エネルギー・ソリューションへの転換に伴う社会的側面や規制面についても取り上げられ、両国の協力関係の強化について議論が交わされた。

分科会では、洋上風力発電、水素と燃料電池、スマート・エネルギー・システム、炭素の回収と貯留、スマート・シティ、エネルギー・環境・社会をテーマにディスカッションが行われた。

駐日ノルウェー王国大使館ウェブサイト

http://www.norway.or.jp/norwayandjapan/policy_soc/tech_environment/esw2015/#.Vd7Wh__osic

ノルウェー: リサーチ・カウンシル・オブ・ノルウェー新総合戦略を発表

リサーチ・カウンシル・オブ・ノルウェーは、2020年に向けた新総合戦略「イノベーションと持続可能性の研究」を発表した。新戦略では、「持続可能性」に焦点を当てて以下の6つの目標を掲げた。

- 1: 先駆的な研究とイノベーションへの投資拡大
- 2: 社会と民間部門における持続可能な解決策のための研究を奨励
- 3: 研究志向かつ革新的な民間部門の育成
- 4: 改革や刷新のための研究を開始・実施する公共部門の助成
- 5: 国際協力およびEUイニシアティブへの参加拡大
- 6: 研究システムの統合的な活動と刷新を促すリサーチ・カウンシルとして機能を果たす

リサーチ・カウンシル・オブ・ノルウェーウェブサイト

http://www.forskningssradet.no/en/Newsarticle/New_strategy_available_in_English/1254010971945/p1177315753918

ノルウェー:教育と開発のためのオスロ・サミット開催

2015年7月5日～6日、オスロに於いて「教育と開発のためのサミット」が開催された。サミットには、潘基文国連事務総長をはじめノーベル平和賞受賞者マララ・ユスフザイさん、約40か国の首脳、閣僚が参加した。ブレンデ ノルウェー外相は、開会の挨拶で、ボック元ハーバード大学学長の「If you think education is expensive, try ignorance」を引用し、教育に投資することの価値と重要性を強調した。また、ソールバルグ ノルウェー首相は、グローバルな教育機会のための資金調達に関するハイレベル委員会 (High-level Commision on the Financing of Global Education Opportunities) を立ち上げた。サミットでは、2030年に向けた今後の国際教育開発の重要なトピックとして、「教育への投資」「女子教育」「質と学習」「緊急時における教育」という4つのパネルセッションが行われた。

日本からは、田中明彦国際協力機構 (JICA) 理事長が出席し、パネルディスカッションにおいて、これまでのJICAの教育支援経験から、教育と学習の質の向上の重要性についてアピールした。

駐日ノルウェー王国大使館

http://www.norway.or.jp/norwayandjapan/policy_soc/policy/oslosummit_education/#.Vdw2Ef_osic

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

http://www.jica.go.jp/press/2015/20150709_02.html

“KI Bladet” ~2015 NO.2~

ストックホルム研究連絡センターがオフィスを置くカロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) では、“KI Bladet”という学内誌を発行しています。誌上で提供されている内容の一部を紹介いたします。

KI Bladet <http://ki.se/nyheter/ki-bladet-karolinska-institutets-personaltidning>

ハムステン学長によるプロローグ

ハムステン学長は、政府による研究への積極的投資が不可欠であるとし、以下の点を強調した。

2016年秋、スウェーデン政府は新しい研究法案を提案することとなっている。法案の中身については、すでに様々な場で議論がなされている。スウェーデンが世界クラスの研究国家であり、その研究成果が経済成長につながるべきであるというのが総意である。しかし、カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) で行われている研究も含め、スウェーデンの研究は、現在、激しい国際競争に直面し、過去数年間で、その優位性を失いつつあることを認識しなければならない。

・教育、研究、イノベーションへの強力な投資

政府の総研究予算における高等教育機関に対する予算割当が、不適切に小さいというのが学術界の共通した認識である。我々より小さなヨーロッパ諸国でもすでに実施しているように、スウェーデンは、今こそ研究、教育、イノベーションに強力な投資をしなければならない。

・教育の質

外部からの研究グループリーダーや著名な研究者の雇用を増やすべきであり、基礎医学から臨床医学へのキャリアパス形成も不可欠である。研究者間のモビリティも高めなければならない。同時に、スウェーデンの高等教育機関の質は、単なる大学経営や政府の予算上の問題ではないことを明確にしなければならない。大学のリーダーシップのあり方や例えば、寄付金の受領・利用について、意思決定権の小ささを是正しなければならない。

さらに、我々の教育プログラムが常に最新であること、研究の質は才能と情熱のある学生たちに素晴らしい教育を届けることに懸かっていることを認識する必要がある。



写真: ハムステン学長
(KI Bladetより転載)

リトアニア: サンライズバレー技術革新センターがオープン

2015年6月、ヴィリニウス市にSauletekis (Sunrise) Valley Technology and Innovation Centreが開設された。センターには、23の研究開発企業、300名以上の科学者・技術者が在籍している。サンライズバレーで実施されるプロジェクトの1つとして、リトアニアのレーザー開発企業 EKSPALA社は米国企業と共同で欧州連合高強度レーザー施設ビーム研究所 (ELI-Beamlines; チェコ共和国) で使用するレーザー開発を行う。

Dalia Grybauskaitė大統領は、開所式において、我々は技術開発への投資を継続しなければならない。それは、リトアニアの研究開発力を高めるだけでなく、雇用の増加と外国からの投資を増やすことにも繋がると述べた。

The Baltic Timesウェブサイト

http://www.baltictimes.com/new_technology_and_innovation_centre_opened_in_vilnius/



Maria Masucci教授を国際担当副学長に任命



写真: Maria Masucci教授
(KI Bladetより転載)

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) は、Maria Masucci教授を国際担当副学長に任命した。

Masucci教授は、「カロリンスカ医科大学は、既に多くの重要な国際的なパートナーシップを結んでいるが、今後さらに世界トップクラスの大学や研究機関との長期的な連携を増やしていかなければならない」と述べた。

Masucci教授は、フェラーラ大学 (イタリア) で修士を取得後カロリンスカ医科大学にて、研究を続けた。またルンド大学教授の他、マサチューセッツ工科大学 (MIT)、ハーバード大学等で客員教授を務めた。ウイルス感染と癌腫瘍発生の関連性を専門としている。

University Nurse—研究の支援

Katarina Göransson氏は、カロリンスカ医科大学病院救急医療部門のUniversity Nurseであると共に准教授でもある。

University Nurseとは、博士学位を有し、最低8年の臨床経験および十分な専門知識、成績、指導経験を有する看護師である。カロリンスカ医科大学病院の臨床看護師としては最高位にあたり、現在、大学病院に10名弱存在する。

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) では、University Nurseに対して3年間にわたり、業務時間の30%を研究に費やすことができるよう支援を行っている。

Göransson氏は、現在カロリンスカ医科大学にて救急治療について研究を行っており、この支援により救急治療における看護師数と死亡率の関係についての研究を開始するとしている。

Göransson氏は、University Nurse制度は、大学の研究と臨床の架け橋になり、様々な分野の研究者ネットワーク構築、研究の推進にも役立つと述べた。



Gunnar Höglund・Anna-Stina Malmberg夫妻が約1億7千万円を寄付



カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) の卒業生であるHöglund・Malmberg夫妻が、カロリンスカ医科大学に1,200万クローネ (約1億7千万円) を寄付すると発表した。寄付金は、医学教育に関する優れた研究に授与される「Karolinska Institutet Prize」に使用されることとなる。Höglund博士は、「大学にとって教育は最重要ミッションの一つだが、研究のほうが見えやすいため教育はしばしば軽視される。」と述べ、大学における教育活動の重要性を強調した。

カロリンスカ医科大学で博士号を取得した後、Malmberg博士は細菌学の教育と研究をしてきた。Höglund博士は、上級講師として生理学を教え、その後、カロリンスカ医科大学にて、様々な教育改革に携わりつつ、国立労働生活研究所の教授を務めた。また、美術品収集に大きな関心を持っており1960年代から数々の美術品を収集した。夫妻は、広く社会の役に立てようと、これらのコレクションをオークションにかけ収益金を近代美術館とカロリンスカ医科大学に寄付することとした。

写真: Gunnar Höglund・Anna-Stina Malmberg夫妻 (KI Bladetより転載)

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしています。ストックホルムセンターHPをご覧ください。最新情報をご希望の方は以下URLから登録してください。
<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

Kyoto International Forum for Environment and Energy (KIFEE)

環境とエネルギーにおける京都国際フォーラム(KIFEE)は、2003年に日本・ノルウェー科学技術協力協定締結を契機に、産業界の協力関係の礎となる長期共同研究の必要性が認識されたことを受け、京都周辺の大学が中心となり創設されました。第8回となるフォーラムがトロンハイムにて開催されます。

日 時 : 2015年9月20日(日)～9月23日(水)

会 場 : ノルウェー科学技術大学(NTNU), Trondheim, Norway

<http://www.ntnu.edu/web/kiffee/about-kiffee>

大野 泉 政策研究大学院大学教授を招へいたイベントについて

(1) Stockholm Seminar on Japan

日 時 : 2015年9月30日(水) 15:00～16:30

会 場 : スtockホルム商科大学 Ohlinrummet

共催機関 : スtockホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)、在スウェーデン日本国大使館、Swedish Institute of International affairs、スtockホルム大学、JSPSスtockホルム研究連絡センター
 テーマ : Development Cooperation in a Post-MDG Era: Can Japan effectively (continue to) contribute to global development?

講演者 : 大野 泉 政策研究大学院大学 教授

討論者 : Anders Olofsgård スtockホルム商科大学欧州日本研究所副所長

モデレーター: Marie Söderberg スtockホルム商科大学欧州日本研究所長

(2) International Conference "Japanese and Nordic Perspectives of Development Cooperation in a Post-MDG Era"

日 程 : 2015年10月1日(木)～10月2日(金)

会 場 : スtockホルム商科大学, Ohlinrummet

主 催 : スtockホルム商科大学欧州日本研究所(EIJS)、大阪大学、JSPSスtockホルム研究連絡センター

テーマ : Japanese and Nordic Perspectives of Development Cooperation in a Post-MDG Era

参加者 : 大野 泉 政策研究大学院大学 教授

Marie Söderberg スtockホルム商科大学欧州日本研究所長

Annika Sundén SIDA(スウェーデン) チーフエコノミスト

Bart Gaens Finnish Institute of International Affairs(フィンランド) シニア・リサーチフェロー

Arne Bigsten ヨーテボリ大学(スウェーデン) 教授

Annica Sohlström Forum Syd(スウェーデン) 事務局長

Paul Midford ノルウェー科学技術大学(ノルウェー) 准教授

Annette S. Hansen オーフス大学(デンマーク) 准教授

Carla Bringas 大阪大学 リサーチ・フェロー

André Asplund スtockホルム商科大学欧州日本研究所 リサーチ・フェロー

Akio Kagawa JICA英国事務所長

Raymond Yamamoto 大阪大学 リサーチ・フェロー 他

日本・リトアニア生命科学シンポジウムの開催

本シンポジウムは、日本・リトアニア共和国の先端科学分野の研究内容を相互に紹介し、中欧・東欧において特に先端科学技術産業の発展に注力しているリトアニア共和国との間での研究活動の相互理解と国際交流を深めることを目的としています。

日 時 : 2015年10月7日(水) 10:00～17:00

会 場 : 東京大学 伊藤国際学術研究センター 中教室(東京都文京区本郷)

主 催 : 日本学術振興会、東京大学、リトアニア研究評議会、駐日リトアニア共和国大使館

問合せ先 : 参加に関するお問い合わせは以下アドレス宛にご連絡下さい。

Lithuanian_Japan_Symposium@pco-prime.com

フィンランド Seminar “Academic Links between Japan and Finland”

JSPSフィンランド同窓会、JSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、“Academic Links between Japan and Finland”をテーマとしたセミナーが開催されます。

日 時 : 2015年10月15日(木)

会 場 : ヘルシンキ大学

2015年度第2回 KVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、KVA-JSPSセミナーが開催されます。

日 程 : 2015年10月12日(月)王立工科大学(KTH)(ストックホルム市)

2015年10月15日(木)ウプサラ大学(ウプサラ市)

2015年10月16日(金)シャルマーシュ工科大学(ヨーテボリ市)

2015年10月19日(月)ルンド大学(ルンド市)

講演者 : 今堀 博 京都大学 工学研究科 教授 他

2015年度第1回 IVA-JSPSセミナーの開催

スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)とJSPSストックホルム研究連絡センターの共催で、IVA-JSPSセミナーが開催されます。

日 時 : 2015年11月3日(火)

会 場 : スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)コンフェレンスホール

講演者 : 矢野 浩之 京都大学 生存圏研究所 教授

渡邊 政嘉 経済産業省 紙業服飾品課 課長

Lars Berglund スウェーデン王立工科大学(KTH) 教授 他

事業のご案内

二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者(若手研究者を含む)が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

平成28年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/shinsei_bosyu.html(日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/call.html>(英語版)

外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成28年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。 <http://www.jsps.go.jp/j-fpo/index.html>(日本語版)

その他

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet) 同窓会 会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍した事があり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx?AcceptsCookies=yes>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jspsto@jspsto.com までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真: 夏の花々

ストックホルム郊外の家々の庭木としても親しまれているライラックの花。日本では、紫色が一般的だが、スウェーデンでは白色もよく見られる。香りも良く、夏の間、庭でたびたび食事や日光浴を行うスウェーデンの人々を楽しませていた。

(撮影 廣瀬良子)

JSPS Stockholm Newsletter 第47号

編集長: 川窪 百合子

編集: 廣瀬 良子

発行日: 2015年9月18日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46(0) 8 5248 4561

Website: <http://www.jspsto.com/> E-mail: jspsto@jspsto.com

JSPS
STOCKHOLM